

## 葉集を読む

松岡 隆子

夫の忌の白鳥帰る声聞けば

矢作 裕子

先日矢作さんから手紙を貰った。この二月、ご夫君が亡くなられてから丸三年となつたと書いてあった。ここまで無事に過ごせたのは俳句や誌友の皆さんの励ましのお陰だと言われる。あの日突然の訃報に言葉を失いながらも、俳句が矢作さんの支えになるようにと書いたことを覚えている。ご夫君の忌日、北へ帰つてゆく白鳥の声を聞くのは辛かろう。でも俳句がある限り矢作さんは確りと進んでいかれるに違いない。ご夫君は矢作さんの俳句の中に生きておられるのだから。

朝寝してすらすらすらと言訳をして

宮崎美智子

不覚にもというのではなく、なんとも堂に入った朝寝である。自分でも驚く程すらすらと言訳の言葉が口をついて出たという。すらすらとはどんな言い訳だったのか知りたくなる。おそらくご夫君は泰然自若とした大らかな人柄であろう。ほのほのとした二人の関係はまるで春風のような。

草の芽のわづかを尖るいのちかな

醍醐喜美枝

菖蒲の芽、萩の芽、芍薬の芽などの名草の芽を含めて春はさまざまな草の芽が萌え出る。冬の寒さの中で育まれてきた命の芽生えは力強い。萌え出る命の勢いをへわづかを失る」と的確に言い留めていて感心した。

駘蕩やいよいよ細き羅漢の眼

鈴木 富代

一読、景の見える句で句意は説明を要さないと思うが、注目したのは長閑ではなくて（駘蕩や）と言っているところだ。駘蕩は長閑の傍題である。長閑に比べて駘蕩は悠々とした時の流れを感じさせられる。何百年もの風雪に耐え眼を細めている羅漢は春風駘蕩の趣がある。駘蕩という漢語の重厚さも羅漢と照応しあつて一句を引き締めている。

雛飾り終へてしばらく雛の前

森田 さか

森田さんは「朝」創刊以来の方で、長年西東京の句会でご一緒している。近くに住んでおられ昔は雛祭りにはよくお邪魔した。毎年立派な七段飾りの雛を一人で飾っておられた。加齢とともに雛壇を作るのが無理になってくる。だが森田さんはせめて親王飾りだけはと飾り続けておられるに違いない。女性にとつて雛人形は一生連れ添うもののように思う。

年なりのお洒落心や四温晴

有馬みどり

寒中の晴れはありがたい。朝からの四温晴れに心が浮き立つ。たまたま句会の日だったのかもれない。何を着ていこうかとあれこれと洋服をとり出す。年をとつてもお洒落心を失わない人は何時までも若々しい。何時までもそうありたいと思いつつ、自粛生活が続く日々、古びた普段着で過ごすことに慣れてしまっているわが身を反省するばかり。お洒落とは身なりを素敵に整えることだ。それなりのお洒落を心掛けたいと思われた。

その他の印象句

来世またちちははの子に寒卵  
 薄氷の色なき色の光かな  
 売られゆく紅梅白梅咲く空き地  
 早生の赤きが淋し冬薔薇  
 春光のいそひよどりであつたかも  
 指のまだ覚えてをりし毛糸編む  
 ふきのたう光の中に摘みにけり  
 一人泣き一人笑つて春愛し  
 いつとなく目覚の悪しき霜の朝  
 亡き父の声が聞こゆる鬼やらひ  
 さより干す辺りかもめの旋回す  
 無事終る母の引越梅真白  
 ひつそりと眉月白き春の昼  
 下町の電線多き冬の空

河本 順  
 岡 美穂  
 安達みわ子  
 堀 真智子  
 見上 恵  
 高野 達子  
 大庭 安代  
 梅澤 惇子  
 山下なつ子  
 佐藤 初枝  
 岡田 恵子  
 大山 玲子  
 小川テル子  
 浅尾 泰昭

あたたかやバス待つ椅子をゆづられて  
 高層の玻璃の夕映え建国日  
 薄ごほり鯉の眠りの覚めやらず  
 法要の昼膳 届く梅の寺  
 観梅の父と娘とふはぎこちなき  
 遠景の光の端に黄水仙  
 町並みの灯の赤々と寒に入る  
 春天へムンクのやうに叫びたし  
 春障子開くれば氷見の波の綺麗  
 清貧が似合うて夫婦梅ふふむ  
 一つ灯を卓に点して霜夜かな  
 ミモザ咲き満つばた山のよく晴れて

桑原 和子  
 澤木 孝子  
 高橋いはを  
 渡辺 正吉  
 朱 桂子  
 山崎 和子  
 露木 崇夫  
 加々美敦子  
 宮田 悦子  
 森田 道子  
 田辺 文枝  
 西島 美晴

